

# 福岡工業大学 学術機関リポジトリ

大学初年次における図書館の利用実態  
—アカデミック・スキルの育成を目的とした「キャリア形成」を事例に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-02 キーワード (Ja): キーワード (En): Academic skills, Career education, University library, First Year Experience, Questionnaire survey 作成者: 中野, 美香 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11478/00001752">http://hdl.handle.net/11478/00001752</a>

# 大学初年次における図書館の利用実態 —アカデミック・スキルの育成を目的とした「キャリア形成」を事例に—

中 野 美 香 (教養力育成センター)

## Use of university libraries among first-year university students —Career education for cultivating academic skills—

NAKANO Mika (Center for Liberal Arts)

### Abstract

This study aimed to examine how first-year students use university libraries and to identify an effective approach to increase their usage thereof as an academic skill. An online questionnaire was administered to 1041 first-year students at Fukuoka Institute of Technology in July 2022. A total of 647 questionnaires were analyzed. The results revealed that 52.9% of the participants found that the introductory lecture on the use of the library with regard to career education was overall useful, and 54% rarely or never used the library in the previous semester. It is recommended that individuals' attributes of engagement with information literacy should be explored further.

Keywords: *Academic skills, Career education, University library, First Year Experience, Questionnaire survey*

### 1. 問題と目的

大学生が大学生活を通じて成長するためにはアカデミック・スキルと呼ばれる大学での学びの作法・技法の習得が欠かせない。アカデミック・スキルには自らテーマを設定し、情報収集して論理的に他者に考えを伝えるコミュニケーションに関するものや、論文や本を批判的に読む方法などさまざまなスキルが含まれる。大学における自主的・自律的学習者に求められるアカデミック・スキルの育成は、大学1年生を対象とした講義やプログラムなどを通じて初年次教育で重視されている<sup>1)</sup>。初年次教育は「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、おもに新生を対象に総合的につくられた教育プログラム」を指す<sup>2)</sup>。文部科学省高等教育局の調査によると、2018年では97%にあたる721大学が初年次教育を実施しており、「大学内の教育資源（図書館を含む）の活用方法」は（80.7%）と導入内容の中でも4番目に多い<sup>3)</sup>。高等教育の質保証に向けた改革<sup>4)</sup>では、大学の附属図書館は情報検索するだけでなく、ラーニングコモンズと呼ばれる学習スペースやプレゼンテーション・コートを備えるなど学生

の主体的な学修を支える機能が強化された。また図書館の利活用は情報通信技術の発展・普及に伴い、情報リテラシーの一つに位置付けられている。2015年には「高等教育のための情報リテラシー基準」が国立大学図書館協会によって策定された<sup>5-6)</sup>。これによると「情報リテラシー」とは、問題解決のために情報を主体的に活用する能力、あるいは自立した生涯学習者であるために、情報を探し出し、評価し、効果的に活用し、情報の様々な形態を活用できる能力。図書館の教育サービスの基本にある考え方<sup>7)</sup>。情報リテラシーは社会人として修得すべき能力と、学生がカリキュラムに沿って主体的に学修していくための能力（アカデミック・スキル）の2つに分類されるが、これらは明確に区分されるものではなく、連続性をもち、体系的に修得できるようデザインされるべきものと考えられている<sup>8)</sup>。

以上の背景により、図書館を含む大学内の教育資源の活用方法をねらいとする様々な講義の導入事例が存在する。名古屋大学の「スタディスキルズ」科目ではアカデミック・ライティングの段階的指導において図書館と連携し、テーマ内容の調査法ワークショップを実施している<sup>9)</sup>。学生はグループでの協働学習を通じて課題発見能力を強化し、必要な方法を学び、レポート作成をおこなう取り組みである。この他、聖路加国際大学看護学部ではアカデミック・ライティングの前提となる基礎的なスキルの習得をねらいとし

た「情報処理演習」を必修化し、「情報の探索と入手」から「情報の管理と活用」に重点が変更された<sup>10)</sup>。学生は高校と大学の学び方の違いを理解した上で、実践を通してスキルを身に付けられるようになっている。一方、初年次では大学の専門科目や卒業後の実際の活用場面を具体的なイメージを持ちにくく、その後のスキルの発展が検討されていないという課題がある。1回の講義で習得することは困難であることから、在学期間中に体系的に取り組む必要がある。また、大学によって学部構成および専門領域や入学者の傾向は異なるため、全国的な傾向を掴むと同時に、各大学に入学する大学生の行動傾向を把握し、知見を蓄積し、それに応じた支援や教育の開発が求められる。PC等のデバイスの所持・経験のみならず、知的リソースへのアクセスは社会経済的な影響と切り離せないことから<sup>11)</sup>、大学1年生が経験を問わずに誰でも学内リソースにアクセスできるような取り組みを考えなければならない。

福岡工業大学では初年次学生を対象とした前期必修科目「キャリア形成」<sup>12)</sup>でアカデミック・スキルの育成の一環として図書館の活用に関する講義を導入してきた。2015年に図書館がリニューアルされたのをきっかけに、図書館のフロアや利用方法を動画にまとめて視聴し、グループワークで自身の利用について意見交換し、利用促進している。しかし、講義後に学生が実際に図書館を利用したかどうかについて詳細な調査を実施していなかった。近年ではコロナ禍の影響で図書館の利用者は減少し、2021年の述べ来館者数（4～12月）は2019年と比較すると49%と、回復傾向にあるが完全には戻っていない<sup>13)</sup>。このうち5～8月および11月以降の来館者の7～8割が継続利用者であることから、入学後できるだけ早期に図書館の利用を促進する働きかけが必要である。また来館頻度が低い学生は11%増加しており、本学学生の図書館利用の実態を掴む必要がある。

そこで本論は「キャリア形成」を受講する福岡工業大学の2022年度入学生を対象に附属図書館の利用実態を明らかにし、アカデミック・スキルとしての図書館リソース活用能力に向けた課題を考察することを目的とする。

## 2. 講義概要

1年次前期に開講される「キャリア形成」は全学部・学科の1年生を対象とし、就業力の育成を目的として大学での適応や就職活動への準備となる基礎的な能力や知識を育むように構成されている（表1）。2022年度は第5回講義「大学での学び方（4）」（2022年5月初旬）で、就業力育成プログラムの紹介と先輩学生へのインタビュー動画を視聴した後、学内リソースの活用として講義の後半で図書館をテーマに扱った。はじめに図書館のスタッフによって作成された利用方法や各フロアの説明に関する約10分の動画を視聴した。動画では図書館は①新しい学びの場を有効活用する、②読書を通して世界を知る施設であること、また必

要に応じて図書館スタッフに相談できることを示した。在学中に必要な際に、速やかに利用できるための基礎的な情報を提供することをねらいとした。

表1 2022年度「キャリア形成」の講義内容

1. コースイントロダクション: キャリア形成とは
2. 大学での学び方(1): 自己管理と講義の受け方
3. 大学での学び方(2): 積極的傾聴とビジネスメールの書き方
4. 大学での学び方(3): 礼儀とマナー
5. 大学での学び方(4): 情報モラルと大学での学び
6. 社会と自己(1): キャリアの概念
7. 社会理解(1): 1つの社会テーマについて考えを深める
8. 社会理解(2): 4つの社会テーマについて考えを深める
9. 社会と自己(2): 社会と自己の繋がりを理解する
10. 社会と自己(3): 自分を社会に位置づける
11. キャリアデザイン(1): 大学院や先輩のキャリアの理解
12. 自己理解(1): プレゼンテーションの方法の理解と準備
13. 自己理解(2): プレゼンテーション①
14. 自己理解(3): プレゼンテーション②
15. キャリアデザイン(2): 半期の振り返りと目標設定

図書館の動画を視聴した後に、アカデミック・スキルとしての図書館の利用についてグループディスカッションをおこない、理解度を確認するとともに、他の学生の利用状況を知る機会とした。欠席者や必要になった時に視聴できるように、講義で用いた動画のURLを示した。第7回講義で新聞記事を用いたレポートを作成する際に、動画や図書館のウェブサイト<sup>14)</sup>からアクセスできるデータベースを利用するように促した。

## 3. 方法

1年次必修科目「キャリア形成」の受講者1041名を対象に第15回講義（2022年7月下旬）で、趣旨説明をおこなった。本調査は講義の改善を目的として実施され、回答は統計的に処理され個人が特定されることはないこと、回答有無および回答の内容は成績には一切関係がないことを説明した。同意が得られた協力者には講義後にMicrosoft Formsを用いてオンラインで回答してもらった。回答時間は約5分であった。本論では協力が得られた657名の回答を分析対象とする。

本調査の目的は、大学1年生の図書館の利用実態を明らかにし、今後の利用促進につながる方法を探索することであった。17項目の質問で構成されるアンケートを作成した。本論ではこれらの質問を「読書習慣」「キャリア形成の講義とその効果」「附属図書館の利用頻度」「附属図書館に対する認識と利用促進」の4つのカテゴリーに分けて、11項目の質問に対する回答を分析する。質問項目は以下の通りである。1つ目のカテゴリーの「読書習慣に関する質問」は問1「あなたは普段、よく本を読みますか」、問2「平

均すると月に何冊程度、本を読みますか」である。2つ目のカテゴリーの「キャリア形成の講義とその効果に関する質問」は、問3「第5回講義で学んだ図書館の使い方（動画）は役立ちましたか」、問4「第5回講義後、附属図書館を利用する機会は増えましたか」である。3つ目のカテゴリーの「附属図書館の利用頻度に関する質問」は、問5「入学してから4月末までを思い出してください。平均すると週に何回程度、附属図書館を利用しましたか」、問6「第5回講義以降（5月上旬から7月下旬まで）を思い出してください。平均すると週に何回程度、附属図書館を使用しましたか」、問7「【問6で5月以降に週1回以上、図書館を利用した】と回答した方におたずねします。利用目的とよく利用する階・場所を教えてください」であった。4つ目のカテゴリーの「附属図書館に対する認識と利用促進に関する質問」は問8「附属図書館のホームページにアクセスしますか」、問9「あなたの附属図書館に対するイメージを教えてください」、問10「あなたが読書をする際に、電子書籍と紙の書籍のどちらが好ましいですか」、問11「1年生の図書館の利用を増やすために、どのようなことをすれば利用が増えると思いますか」であった。自由記述のテキスト分析にはKH Coder 3を用いた。

## 4. 結果と考察

### 4.1 読書習慣に関する質問

問1「あなたは普段、よく本を読みますか」の回答を以下に示す：「そう思う」100名（15.2%）、「ややそう思う」147名（22.4%）、「わからない」51名（7.8%）、「あまりそう思わない」178名（27.1%）、「そう思わない」181名（27.5%）。この結果より、読書習慣がある学生は37.6%（247名）であるのに対して、読書習慣がない、あるいはほとんどない学生は54.6%（359名）であった。この結果より、読書習慣のない学生の方が読書習慣のある学生より多いことがわかる。

問2「平均すると月に何冊程度、本を読みますか」の回答は、回答が得られた655人のうち「0～2冊」521名（79.5%）、「3～4冊」54名（8.2%）、「5～9冊」40名（6.1%）、「10～15冊」35名（5.3%）、「20冊以上」5名（0.9%）であった。この結果より、約8割の学生が月に0～2冊であり、このうち月に0冊と回答した学生は218名（33.3%）であった。一方、月に20冊以上など多くの本を読む学生もおり学生間の差が大きかった。この質問では本のジャンルを問わずに回答してもらったため、今後は詳細な調査が必要である。

### 4.2 キャリア形成の講義とその効果に関する質問

問3「第5回講義で学んだ図書館の使い方は役立ちましたか」の回答を以下に示す：「そう思う」150名（22.8%）、「ややそう思う」198名（30.1%）、「どちらでもない」222

名（33.8%）、「あまりそう思わない」41名（6.2%）、「そう思わない」46名（7.1%）。この結果より、半数以上の学生が役に立ったと回答していたが、それほど役に立たなかったという学生も1割強いた。以下に回答理由を示す。

「役に立った」学生の回答理由を挙げると、「初めて行く時に助かった」「講義をきっかけに利用し始めた」「利用の仕方だけでなく図書館でできることを知れた」「ウェブサイトでも調べられることができることを知った」などがあつた。入学直後の学生にとっては講義の動画で図書館の場所や使い方に関して新しい情報を得て、利用促進につながったという回答が多かった。

「どちらでもない」と回答した学生の理由は、「元々使っていたから」「3階や5階はあまり利用しなかったから」「図書館オリエンテーションで事前に説明を聞いていたから」「結局、図書館に行っていないから」があつた。利用している学生は既に知っていたという回答が、利用していない学生にとっては利用につながらなかったという回答が多く見られた。図書館が主催するオリエンテーションに参加した学生にとっても有益な内容になるよう、内容の整理が求められる。図書館と講義をつなぐ科目コーディネーター<sup>15)</sup>の導入も検討の一つになるであろう。

「役に立たなかった」学生の回答理由は、「あまり覚えていない」「利用できてない」「（欠席等で）動画を見ていない」などがあつた。講義を受講していない、あるいは受講していても情報を得られていない学生の回答が目立った。覚えていない学生については、元々図書館や本に関心がなく、興味をもって動画を視聴できなかった可能性もある。興味関心をもって動画を視聴する工夫と、視聴後に行動につなげるための工夫を考える必要がある。

問4「第5回講義後、図書館を利用する機会は増えましたか」の回答を以下に示す：「そう思う」74名（11.2%）、「ややそう思う」109名（16.6%）、「どちらでもない」176名（26.8%）、「あまりそう思わない」115名（17.5%）、「そう思わない」183名（27.9%）であった。この結果より、講義をきっかけに利用した学生は約3割いたが、利用する機会が増えたとは言えない学生は半数近くいることがわかる。回答理由を以下に示す。

機会が増えた学生は「図書館の本の借り方や空いてる日が分かって本を借りにきたり、勉強したりするために利用するようになった」「とても充実している施設だと思ったから」「便利な機能を知り、図書館に行く意欲が高まったから」「講義の合間の時が空いた時に映画を見たり、プログラミングの課題を済ませるために利用したりするようになったため」があつた。「どちらでもない」と回答した学生は、「前から行っていた」「内容を覚えていないから」「図書館に行く暇がないから」などがあつた。機会が増えていない学生は、「行く理由がなかったから」「本に興味がない」「読みたい本が無い」「場所がわからないから」「動画を見なくても使おうと思っていた」「使おうと思わなかった。

地元には図書館があるから」「講義場所から遠いから」「使い方がわかることと図書館の利用することは関係ないと思うから」であった。

### 4.3 図書館の利用頻度に関する質問

問5「入学してから4月末までを思い出してください。平均すると週に何回程度、福岡工業大学の図書館を利用しましたか」の回答を以下に示す。「週4日以上」19名(2.8%)、「週2-3日」77名(11.7%)、週1日137名(20.9%)、「ほとんど利用しなかった」256名(39.0%)、「まったく利用しなかった」168名(25.6%)。この結果より、週1回以上、図書館を利用した学生は35.5%(233名)であるのに対して、ほとんどあるいはまったく利用しなかった学生は6割強(424名, 64.5%)であった。この結果より、3分の1程度の学生しか利用していないことがわかる。

問6「第5回講義以降(5月上旬から7月下旬まで)を思い出してください。平均すると週に何回程度、福岡工業大学の図書館を使用しましたか」の回答を以下に示す。

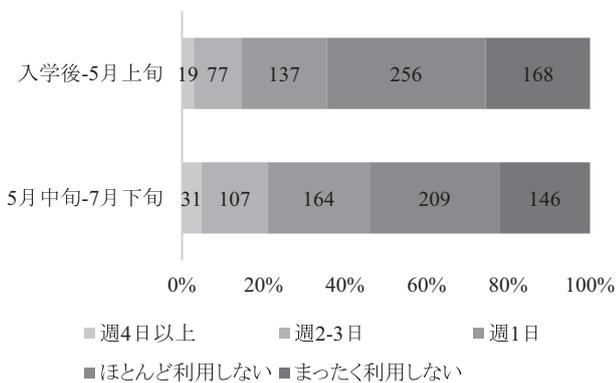


図1 講義前後の図書館の利用頻度の変化

「週4日以上」31名(4.7%)、「週2-3日」107名(16.3%)、「週1日」164名(25.0%)、「ほとんど利用していない」209名(31.8%)、「まったく利用していない」146名(22.2%)。図書館利用に関して学んだ第5回講義前後の利用頻度の変化を図1に示す。この図より、入学当初と比較すると「ほとんど利用していない」学生数が減り、「週1~3日」利用する学生が増えていることがわかる。一方で、「まったく利用していない」学生数はあまり変化がなかった。

問7「問6で5月以降に週1回以上、図書館を利用した」と回答した方におたずねします。利用目的とよく利用する階・場所を教えてください。実際には存在しない「1階」「2階」が回答に含まれる場合は除外した。248件の自由回答のうち階が含まれた回答は239件であった。図書館は本部棟3~5階に位置するが、図書館内で何階にあたるかとして回答されたと推察される。誤解が生じないよう、今後は質問項目を修正する必要がある。

利用する階の内訳と階数が含まれた回答における割合を以下に示す。3階138名(24.8%)、4階70名(12.6%)、

5階31名(5.6%)。各階のフロアの蔵書・設備・サービスは以下の通りである。3F Active Floor 図書(指定・シラバス・教職員著作)、和洋雑誌、新聞、イベントスペース、メディアブース、グループ学習ブース、サポートデスク、4F Quiet Floor 図書(和書・資格試験図書・英語科図書ほか)、学習スペース、サポートデスク、5F Silent Floor 図書(和書・洋書・参考図書ほか)、集中カウンター、学習ブース、ラボである。この結果より、3階が最も多く、静かにする必要がある上の階に上がるにつれて人数が少なくなった。3階が多かったのは、友人と訪れてグループ学習できる点や、指定図書等の1年生にとって必要な書籍が置かれている点などが考えられる。一方で、上記に述べたとおり、実際の本部棟3階と回答した学生と、実際には本部棟の5階にあたる図書館の中の3階を回答した学生が混在している可能性がある。この他、階数は示されておらず目的や用途のみの回答も多く見られた。

次に各フロアで何をおこなっているのかを詳細に検討するために、自由記述の回答に含まれる頻出語句を調べた。このうち頻度が10以上のものを以下に示す:「勉強」105、「スペース」54、「学習」48、「利用」33、「課題」29、「自習」26、「グループ」19、「レポート」19、「映画」15、「友達」12、「パソコン」10であった。この結果より、最も多い抽出後は「勉強」であり、その後、「スペース」「学習」と続くことから多くが勉強や学習のために図書館を訪れていることがわかる。「課題」「自習」「レポート」の回答が上位にあったことから、講義の課題やレポートや自習のために使用していることがうかがえる。空きコマの利用のためか、「映画」も含まれていた。以下に回答の一部を示す。

- ・ 3階の大人数で座れるスペースで友達と勉強した
- ・ プレゼンを友達と作る時に3階を利用した
- ・ 一人の時は4階の一人用のスペースで勉強をして、2人以上の時は3階の学習ブースを利用しています
- ・ 本を借りる、友人と課題をする、活動の話し合いをメンバーとする。3階をよく利用する
- ・ 3階のソファ パソコンの充電しながら友達と会話しながら課題を進めるため
- ・ 4階 資格コーナー

これらの回答から、一人で使用する場合とグループで使用する場合があります、人数や目的に応じて積極的に利用している学生と、課題などで友人に誘われたから利用するという学生の傾向が明らかとなった。利用頻度の高い学生を増やし、講義の課題等で図書館利用が必須の課題を課すことによって、全体の利用率が上がるのではないかと考えられる。

#### 4.4 図書館に対する認識と利用促進に関する質問

問8「附属図書館のホームページにアクセスしますか」の回答結果を以下に示す。「そう思う」56名(8.5%)、「ややそう思う」119名(18.1%)、「わからない」95名(14.5%)、「あまりそう思わない」144名(21.9%)、「まったくそう思わない」243名(37.0%)であった。この結果より、ホームページにアクセスすると回答した学生は全体の3割にも満たず、アクセスしないと回答した学生は6割近かった。この結果より、ホームページの存在を知らないか、知っているも利用していない学生が多くいることがわかる。

問9「あなたの附属図書館に対するイメージを教えてください」についての自由記述回答の共起ネットワークを図2に示す。最も多く見られたのは「勉強」「場所」「スペース」「便利」などのグループ01である。問7の回答と同様に、勉強場所としてのイメージが多かった。次に「本」「多い」「たくさん」などのグループ04である。専門書から一般書まで様々な書籍が揃う図書館のイメージが含まれている。学生にとって図書館は本を借りるだけでなく、勉強に最適な場所であると同時に、映画などの娯楽にも対応可能である。今後は利用目的に応じた使用方法を説明することで、幅広い利用を促進できるだろう。

問10「あなたが読書をする際に、電子書籍と紙の書籍のどちらが好ましいですか」の回答を以下に示す。557名の回答のうち「紙の書籍」342名(61.4%)、「電子書籍」164名(29.4%)、「どちらとも言えない」51名(9.2%)であった。この結果より半数以上が紙媒体の書籍がよいと回答しているのに対して、電子書籍がよいと回答した学生も3分の1であり、「どちらでもない」と回答した学生は紙媒体も電子書籍もどちらも使用していると捉えると、電子書籍を利用する学生は半数程度いると推測される。回答理由を以下に示す。

「紙の書籍」がよいと回答した学生

- ・電子書籍は目が痛くなる
- ・小さい頃から紙で慣れている
- ・劣化具合でどれだけ読んだか感覚的にわかる
- ・紙が好き
- ・形に残したい
- ・紙の方が読んでる感じが強く、印象に残りやすい

「電子書籍」がよいと回答した学生

- ・落書きがない
- ・持ち運びが便利、無くなることがほとんどない
- ・電車の移動時間などに読むことが多いため
- ・紙が嫌いだから。すぐ散らかる
- ・借りたいと思ったらすぐに借りれる
- ・紙だと読む気にならない
- ・いつもスマホやパソコンを使っているのが楽
- ・図書館に返しに行かなければならないのが手間

- ・目次ですぐに移動できて、大事な所をすぐに見つけられる

「どちらでもない」と回答した学生

- ・どっちも魅力がある
- ・小説などは紙で、論文などは電子書籍で読んだ方が読みやすい／目的によって変わる
- ・電子書籍は提供するサービスが終了する等した際に読めなくなるが、紙の書籍は紙の劣化や水没等の物理的な損傷に弱く、どちらも保存の面において一長一短である
- ・特に気にしたことがない
- ・読まないから
- ・電子書籍は目が疲れる。紙は拡大できない

「紙の書籍」「電子書籍」のどちらかがよいと回答した学生は、一方にデメリットよりもメリットを多く感じるという意見が多かった。例えば「紙の書籍」では物理的なモノとしての良さもあれば、それが荷物や管理の負担になることがある。「電子書籍」についても、データであることの便利さはあるが、目の負担もある。「どちらでもない」という意見はどちらの視点も踏まえた客観的な意見と、本を読まないという意見に分けられた。利用状況や目的に応じて選択肢が増えるように、現在、数が比較的少ない電子書籍を充実するのも一つであろう。

問11「1年生の図書館の利用を増やすために、どのようなことをすれば利用が増えると思いますか」の106名の回答をコーディングしたところ、6つのカテゴリーが抽出された：「宣伝する」「講義の課題にする」「場所の工夫」「イベントの実施」「書籍の充実」「その他・不明」に分けられた。カテゴリーに当てはまる回答があった場合は1、ない場合は0として計算した。筆者を含む2名で分析し、不一致があった場合は議論により解消した。結果を以下に示す。「宣伝する」39名(36.8%)、「講義の課題にする」31名(29.2%)、「場所の工夫」11名(10.4%)、「イベントの実施」10名(9.4%)、「書籍の充実」4名(3.8%)、「その他」11名(10.4%)。この結果より、「宣伝する」が最も多く、次に「講義の課題にする」を含めると7割近くの学生が回答していた。各カテゴリーの回答を以下に示す。

「宣伝する」

- ・図書館をあまり目にしないので分かりやすいポスターを作る
- ・図書館の魅力を体験入学の時から教えている例として先輩の図書館の使い方などを参考にみる
- ・SNSで図書館の便利さを発信する
- ・図書館のいい所、学生の興味・趣味に関する本をたくさん紹介する
- ・myfitの掲示に図書館からのお知らせをアップする
- ・流行りの本、図書館のよさについての動画

- ・普通の図書館と異なっていて勉強するのに役立つ設備が整っていることをもっと発信する

「講義の課題にする」

- ・図書館の本を借りそれについてプレゼンをするなどの内容の授業を取り入れる
- ・図書館で調べ物をしないといけないようなレポートを課題にする
- ・図書館を利用する講義・ゼミを行えば行かなくてはならないので増えると思う
- ・一度、図書館の内部に連れて行って、どのようなものなのかを実際に体験させる

「場所の工夫」

- ・図書館3階にあるグループで使う部屋を増やす
- ・図書館にカフェなどを設置する
- ・図書館の空気感が好きなので、フィットインサポートのような勉強の質問をできる空間が図書館の中に欲しい
- ・場所を分かりやすくすれば今以上に人は増える
- ・場所の不便さを改善する。B棟で授業があった後に、どこかで勉強しようと思った時に、図書館は遠いと感じる
- ・本をあまり読まない層に無理やり勧めて読ませるより、図書館で何が出来るのか（映画鑑賞、学習、iPad貸出など）を教えることで図書館に来る機会を増やし、その

時におすすめの本コーナーか何かを目に入るところに置き、読書に興味を持たせる

「イベントの実施」

- ・普段本を読まない人、図書館を利用しない人のための企画をする
- ・電子書籍を増やす、図書館内でなにか人を引き寄せるイベントがあれば増えると思う
- ・図書館コンクールのようなイベントを行う

「書籍の充実」

- ・漫画や今流行りのアニメの小説を置くことをオススメする。なぜなら、図書館にはそういう本が欲しいっていう意見をよく聞くから
- ・最新の情報を手に入れたいからSDGs関連の本、新しい専門書をもっと増やしてほしい

「その他」

- ・利用することでポイントが貯まって、それで図書館の自動販売機でジュースが買えるようにする
- ・学問や本に興味のない人はどうやっても図書館に来ないので、まずは学問や本に興味を持ってもらうような取り組みを実施する
- ・図書館で勉強した人としてない人の成績の比較

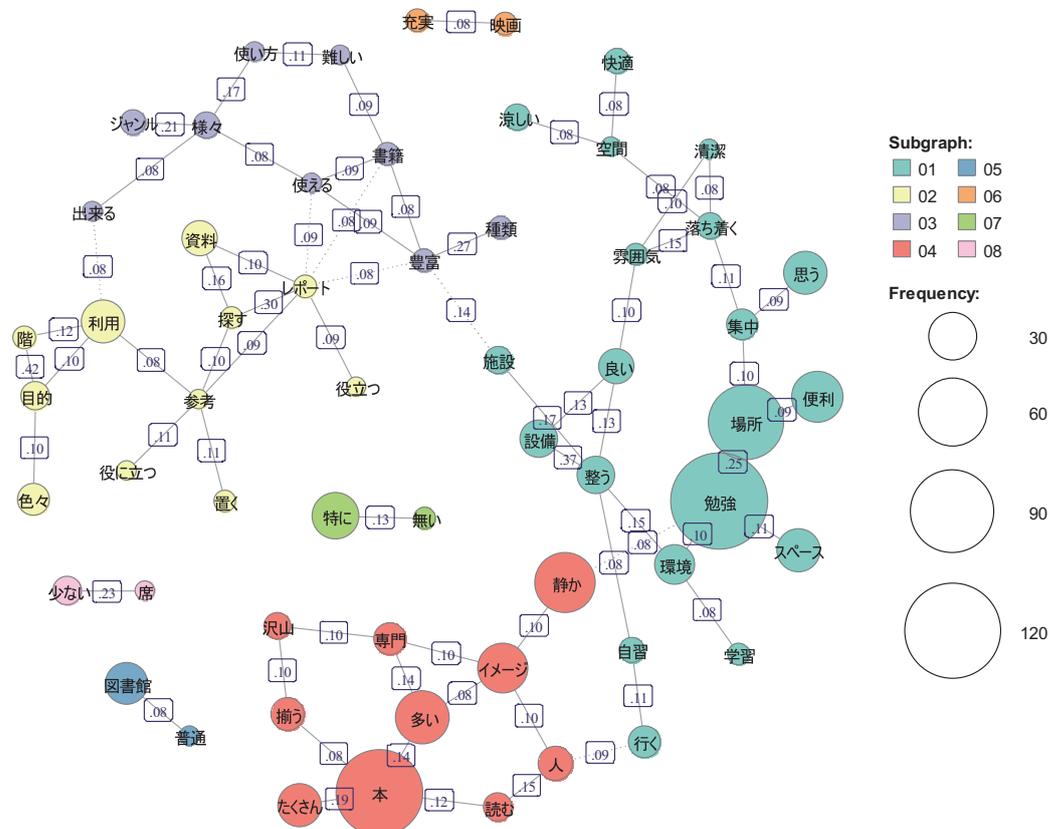


図2 「図書館のイメージ」の共起ネットワーク

- ・私は増やして欲しくありません。勉強する場所が減るから増やすならもっと図書館を大きくしてください
- ・1年生は図書館に対するイメージがあまりないので、気軽に来れるような工夫が必要だと思う
- ・学校に限らず図書館に行ったことがないのでわかりません

大学1年生に利用促進方法をたずねたところ、多様なアイデアが得られた。利用状況によって考えが異なることから、それぞれに効果的な方法でアプローチすることが必要であると考え。以上の結果を基に、図書館利用に対するエンゲージメントの高低による学生の行動の違いを分類した(表2)。エンゲージメントが高い層は、普段から読書に慣れて親しんでおり、リソースを自ら探求し、図書館をよく利用する内的動機づけの高い学生である。次に中間層は外的に動機づけられており、必要があれば読書し、必要があれば図書館に行く学生である。最後にエンゲージメントが低い学生は、ほとんど読書をせず、ほとんど図書館に行かない学生である。

表2 エンゲージメントによる図書館利用行動の分類

エンゲージメント	行動
高い	読書に慣れて親しんでいる 図書館をよく利用する
中間	必要があれば読書する 必要があれば図書館に行く
低い	ほとんど読書しない ほとんど図書館に行かない

エンゲージメントの高い学生は自分なりの利用方法を探索しているが、同じように図書館をよく利用する学生たちの「本好きのコミュニティ」を形成することで新たな出会いを提案できると考えられる。お気に入りの本を紹介するビブリオ・バトルの実施も有効であろう。次に中間層は、外的に動機づけられれば利用することから、授業や課題などでの利用促進が効果的であると考え。それをきっかけにしてリソースを有効活用するよう継続的な支援が重要である。最後に、エンゲージメントの低い学生にとっては、継続的に動機づけを高める支援をおこなうとともに、学問や知的活動の楽しみを知る機会が必要である。そのためには、上手に利用している学生とのグループワークを通じて刺激が得られる可能性もあり、ターゲットを意識した宣伝や企画のアプローチが求められる。一方、席が少ない問題や1年生が使いにくいといった声も明らかになったため、単に利用を増やすだけでなく、快適に利用できる工夫が今後期待される。

## 5. まとめと今後の展望

本論は福岡工業大学の1年生の図書館の利用実態の現状を明らかにし、図書館利用を増やすための方法を考察することを目的とした。本調査より、読書習慣のある学生は少なかったが、キャリア形成の講義動画は概ね役立ったことが明らかとなった。一方で、図書館に対する認識と利用促進に関する質問については、利用状況によって違いがみられたことから、図書館利用に対するエンゲージメントによる分類がまとめられた。この知見を基に、各層に対する効果的なアプローチの考案および実践が次の課題である。いずれの層においても、大学入学直後の初期経験がその後の大学生生活に影響を与えられとされる。また今回の調査では多くの有益な提案が得られたことから、今後も継続して学生の視点に立ち、学生のニーズを把握することが重要である。

図書館のリソースの活用は、人生100年時代において生涯学び続ける力ひいてはVUCA時代を生き抜く力と直結する。VUCAとはVolatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとった表現である。本論では初年次を対象としたが、個別最適学<sup>16)</sup>の実現には大学4年間の学びを全体的に捉え、体系的・継続的な支援方法の構築が必須であると考え。本論で明らかになった現状の課題を基に、図書館と連携しながら教職協働で学生の学びの支援に関して研究を継続していきたい。

## 参考文献

- 1) 山田礼子：大学における初年次教育の展開. クオリティ・エデュケーション, 2, 157-174. 2009.
- 2) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて(答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 3) 文部科学省高等教育局：平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について [https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt\\_daigakuc03-000010276\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigakuc03-000010276_1.pdf) (2022年10月28日閲覧)
- 4) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申) [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2022年10月28日閲覧)
- 5) 岡部幸祐：高等教育のための情報リテラシー基準 2015年版の策定経緯と活用方法. 大学図書館研究, 105, 30-41. 2017.
- 6) 飯尾健：大学教育における情報リテラシーの能力基準に関する検討：国立大学図書館協会『高等教育のための

- 情報リテラシー基準』の拡張に向けて. 京都大学大学院教育学研究科紀要, (65), 415-427. 2019.
- 7) 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会：高等教育のための情報リテラシー基準, 2015年版 <https://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503b.pdf> (2022年10月28日閲覧)
- 8) 野末俊比古：教育・学修支援と情報リテラシー教育：「新しい学び」を実現する大学図書館へ. 大学図書館研究, 105, 1-8. 2017.
- 9) 中東雅樹・津田純子：主体的な学びを促すアカデミック・ライティングの段階的指導法の開発. 名古屋高等教育研究, 16, 305-324. 2016.
- 10) 松本直子・川口嘉奈子：看護学部の初年次教育における情報リテラシーの授業の再構築. 聖路加国際大学紀要, 7, 136-141. 2021.
- 11) 畔津忠博・吉永敦征：大学初年次生における情報リテラシーの経年の変化. 研究報告教育学習支援情報システム (CLE), 2021(21), 1-7. 2021.
- 12) 小田部貴子・宮本知加子・中野美香・阿山光利：就業力育成科目「キャリア形成」の授業実践による「4つの力」の変化. 福岡工業大学 FD Annual Report, 3, 61-68. 2014.
- 13) 福岡工業大学図書館運営委員会：2021年度福岡工業大学附属図書館利用状況（4-12月）2021年度第10回福岡工業大学図書館運営委員会資料, 47-52. 2021.
- 14) 福岡工業大学・福岡工業大学短期大学部附属図書館：<https://www.lib.fit.ac.jp/> (2022年10月28日閲覧)
- 15) 永井順子：「図書館活用法」2020年度コロナ禍でのオンライン授業の実施と今後について. 明治大学図書館紀要, 25, 25-33. 2021.
- 16) 中央教育審議会：「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～(答申) [https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf) (2022年12月13日閲覧)